

【連載】
ヘンツェ：オペラ
【ルプパ】
ヤツガシラと息子の愛の勝利



ルプパ／幸福のかたち

ザルトツブルクの初演を聴いて

白石美雪 音楽評論家 MYUKI SHIRASHI

ハンス・ヴェルナー・ヘンツェの歌劇《ルプパ(ヤツガシラ)と息子の愛の勝利》は、水面に落ちた滴が輪を広げていくように、静かな余韻を残すメルヘンである。ザルトツブルク音楽祭の委嘱作品として、2003年、祝祭小劇場で行われた初演は眼にも耳にも美しく、気難しい現代作曲家のイメージを爽やかに打ち砕くものだった。この年はP・ルジツカが総裁となって2年目で、コンサート形式を含めて9つのオペラが上演されたのだが、じつは音楽祭全体が波乱含みの様相を呈していた。S・ヘルハイム新演出の《後宮からの誘拐》が上演中にブーイングの嵐となる問題作だったほか、呼び物の《ホフマン物語》では主役のN・シコフが調子を崩し、歌手の代役と演技者の代役を立てて、アテレコ風の歌唱で切り抜ける始末。いつもは涼しい高原の避暑地が連日30度を越す猛暑に見舞われるなか、ヘンツェのオペラは意外にも一服の清涼剤となったのである。

成功の要因は第一に、演出家のD・ドルンがJ・ローゼの装置と衣裳、T・レフラーの照明によって作り上げたシンプルで色彩の凝らされた舞台にある。アラブに設定された架空の国々では、巨大な植物がヴィヴィッドな色で描かれ、想像上の民族衣装をまとった群集が現れる。場面ごとにトーンの揃った甘美な色彩でまとめられ、まるで1枚1枚、絵本のページを切り取ってきたかのように美しかった。

こうした演出を可能にしたのは、作曲家自身が手がけたおとぎ話風の台本である。初期から創作の根源を物語性に求めてきたヘンツェは、これまでW・オーデンとC・カルマン、I・バッハマンらの書いた台本を用いて優れた歌劇を作ってきた。しかし、今回はアラブの民話に取材しながら、自分で台本を書き上げている。したがってこの自由な冒険物語には、ごく自然に77歳を迎えた作曲家の人生観や心模様が刻み込まれている。

タイトルルプパは鳥のやつがしらのことで、頭に冠羽をもち、金色に輝く羽を身にまとっている。ペルシャには、既婚の女性が鏡の前で身づくろいをしていたとき、突如、無言のまま現れた義理の父親の視線を逃れて、冠をつけたこの鳥に変身したという伝説がある。ヘンツェはこうした言伝えとか、彼のオリヴ園をすいすいと飛び回るつがいのルプパから、オペラのインスピレーションをかきたてられたという。

舞台は年老いた王の1人語りではじまる。彼は窓辺に訪れる幸せの鳥ルプパの高貴な姿に魅せられ、毎日、楽しみにしていた。ある日、幸福に酔いしれて捕まえようとすると、ルプパは嘴でその手に傷を負わせ、飛び去ったまま、二度とやっこない。王は生きている間にもう1度、ルプパを見たいと切望し、3人の息子たちを探しに行かせる。怠け者の兄たちは誠実な末っ子アル・カジム1人に困難な道を歩ませ、自分たちも出かけるかにみせかけて、その場でトランプゲームに興じていた。その間、カジムは天使のようなデーモンと友だちになり、彼の助けを借りてパーテ国の園にいたルプパを手に入れる。

カジムはパーテ国の女王から、暴君ディジャブに誘拐されたユダヤの女王バディアトを救い出すよう頼まれ、デーモンとともにキプンガー二国へやってくる。カジムとバディアトはお互いにひと目で恋に落ち、深い絆で結ばれる。ディジャブは「カジムの命を救って」と懇願するバディアトの愛情に折れて、2人を解放する。次に訪れたマタンドー二国で、ディジャブが語った謎の木箱を手に入れ、3人は父の待つマダへの帰路をいそぐ。

国境でデーモンと別れたカジムとバディアトは、待ち受けていた2人の兄に騙されて井戸へ突き落とされ、木箱とルプパを奪われてしまう。だが、彼ら

の危機を直感して戻ってきたデーモンに助けられる。感謝の気持ちをどう表したらいいだろうかときかれて、デーモンは思い出にカジムの故郷にある「赤いリンゴ」が欲しいといい、カジムは約束する。戻ってきたカジムとバディアトを見て、すべてを了解した王は2人の兄を追放。「カジムとバディアトの婚礼を明日、とり行う」と宣言する。ところがカジムは「明日は困る。デーモンに命の赤いりんごを届けるから」と即座に答えて、父と恋人を残して旅立つのである。

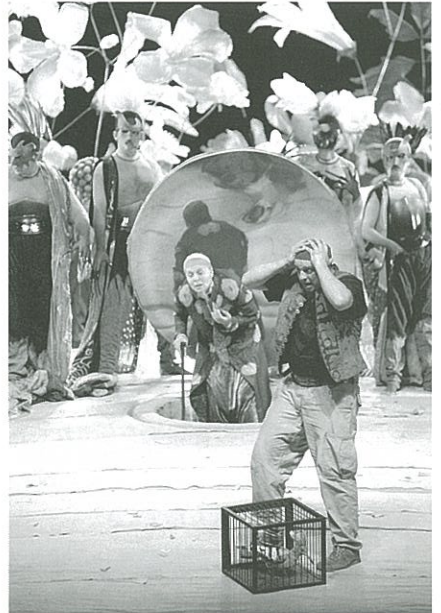
3人の兄弟、3人の年老いた王、3つの国、3つの冒険と宝(ルプパ、バディアト、木箱)から組み立てられたこの物語は、チェレスタやハーブ2台を含む通常編成のオーケストラと現実音の録音によって、みごとに聴覚化される。鳥の羽ばたく音が再生されると、切れ目なくピアノの内部奏法や打楽器によるノイズへと接続し、オーケストラがシンプルで、ときにコミカルな動きの音楽を織り上げていく。ストラヴィンスキーの《兵士の物語》の行進曲のようなフレーズがあったかと思うと、夜明けの場面では鶏の音が録音で流れ、東洋風の節回しでイスラム風の祈りが捧げられ、パイプ・オルガンが運命の時を暗示する。

こうした情景描写を背景に、豊かな歌唱旋律が音楽を展開していく。ジグシュピール風に会話が交じり、シェーンベルク流のシュプレヒゲザング(語りと歌の間)が用いられているものの、基本は伝統的な歌唱法で、多くの場面でのびやかなアリアや重唱がきかれる。響きはいささか保守的だが、ドラマと音楽の結びつきは緊密。伝統にのっとった歌唱法と演奏法を基盤としているところにも、オペラ作曲家として重きをなしてきたヘンツェの手腕が光っている。

正義を貫く主人公が友情と恋に恵まれ、危険な冒険に出かけて宝を持ち帰るといふ、親しみやすく、わかりやすいストーリーには、モーツァルトの歌劇《魔笛》や《後宮からの誘拐》の反映を読み取ることができる。カジムはタミーノ、バディアトはパミーナ、彼女を救い出してくれと頼むパーテ国の女王は夜の女王というわけだ。バディアトを愛しむ暴君ディジャブはザラストロであると同時に、セリムの状況にも似ている。だが、この物語のテーマがモーツァルトの世界と一線を画しているのに気付くのは幕切れのシーンだろう。メーテルリンクの戯曲『青い鳥』と同じく、探し求めていた幸福の鳥も手元に長くは留まらない。ようやく戻ってきたら、老王はあっさりとして籠からルプパを解き放つ。さらに、幸福を運んできた息子のカジムも父親と恋人を残して旅立っていくのである。

このオペラにおいて、ルプパ(あるいは3つの宝)はおそらく美の象徴であり、芸術の神髄を表象しているのではないだろうか。どんなに憧れても手の内につかまえることはできず、カジムのようにそれを所有することも消費することも望まない者だけが、美とともに生きられる。しかし、カジムに安住の地はなく、次から次へと冒険は続く。それはまた、理想の美を追い求める芸術家のすがたと重なる。

暮れ行く草原に佇み、呆然と、しかし諦念をもって遠ざかるカジムを見守る父親とバディアトの静かな後姿にはさびしさが漂う。人生の黄昏にさしかかったヘンツェの心はきっと、こんな風に穏やかな哀感に満ちているのだろう。夢中になって冒険を続けるカジムはかつての自分。そして黄昏の中に立ち尽くしている老王はいまの自分。《ルプパ》を自ら「最後のオペラ」と決めたヘンツェの惜別の思いが、このラスト・シーンに凝縮されているのを感じた。



2003年ザルトツブルク音楽祭の公演より
手前は主役アル・カジム役のマティアス・ゲルネ
© clarchen & Mattias Baus

第549回定期演奏会
2007年10月20日(土)6:00p.m.
サントリーホール
ヘンツェ：
オペラ【ルプパ】
ヤツガシラと息子の愛の勝利
(演奏会形式、全2幕、字幕付、日本初演)

指揮=飯森範親
アル・カジム=ラウリ・ヴァッサー(バリトン)
バディアト=森川栄子(ソプラノ)
デーモン=トム・アレン(テノール)
老人=松下雅人(バス)
アジブ=
ファブリス・ディ・ファルコ(カウンター・テナー)
ガリブ=ジェローム・ヴァルニエ(バリトン)
マリク=小川明子(メゾ・ソプラノ)
ディジャブ=小野和彦(バス)
ヴォーカル・アンサンブル=東京混声合唱団
舞台演出=飯塚勲生

¥10,000 A¥8,000 B¥6,000 C¥5,000
6/1(金)発売

平成19年度文化庁芸術創造活動重点支援事業
助成：アフィニス文化財団
財団法人：ロームミュージックファンデーション
財団法人：財団法人 花王 芸術・科学財団
社団法人：私的録音補償金管理協会(Sarah)